

「漱石と鬱」

霧の中に閉じ込められ立ち竦む青年時代の不安と焦燥

第一回目の変調は明治 27 年（1894 年）に始まっています。その前年に帝国大学文化大学英文科を卒業し、東京高等師範学校の英語教師となった漱石は、後にこの頃のことを、「何だか不愉快な煮え切らない漠然たるものが、至る所に潜んでいるようで堪らない」（「私の個人主義」）と語っています。

明治 27 年 9 月 4 日付の正岡子規宛ての手紙には、心の不平不安をしずめようと旅に出、松島の瑞巖寺で座禅しようとして断念し、海で荒海に飛び込み、宿屋の主人に危ないと言われた経緯を報告しています。放浪の旅のようなことをやっているのです。

この年末から翌年にかけて鎌倉の円覚寺の帰源院に参禅。しかし見性にはいたらず、4 月には突然高等師範学校をやめて愛媛県立松山中学校の教師となります。高等師範教師としての身分は他人からも尊敬される恵まれたものであり、この職をなげうっての突然の松山行きは、周囲を驚かせたことでしょう。

学習院での講演を基にした評論「私の個人主義」ではこの頃のことを「人知れず陰鬱な日を送った」「不安を抱いて大学を卒業し、同じ不安を連れて松山から熊本へ引っ越し、又同様の不安を胸の底に畳んでついに外国迄渡った」「霧の中に閉じ込められた孤独の人間のように立ち竦んでしまった」「恰も囊の中に詰められて出ることの出来ない人のような気持」で焦燥していたなどと述べています。

しかしこの焦燥、悩みの正体は何であったのか。失恋や失職など、はっきりとした原因は見当たりません。原因は漱石の内部に求められなければならないでしょう。その意味でも、漱石が自らの「煩悶」について語っている「私の個人主義」は非常に興味深い文献です。中には「私は神経衰弱に罹りました」という言葉もあり、自分の精神が時に常態ではなかったという自覚を持っていたことがわかります。

さてこの変調は夏ごろにはよくなったようで、松山に来た子規としきりに俳句を作ったりしています。しかし松山での生活も長くは続かず、明治 29 年には熊本第五高等学校に赴任。この年、中根鏡子と結婚します。

鏡子夫人の証言でみえてくる人間関係の妄想知覚

第二回目の精神変調は、ロンドンに留学した翌年、明治 34 年（1901 年）夏頃から始まっています。7 月 1 日の日記には「近頃非常ニ不愉快ナリクダラヌ事が気ニカカル 神経病カト怪マルル」という記述があります。

明治 35 年の 2 月頃からは妻に宛てて叱責や小言めいた内容の手紙をかいており、9 月 12 日付けの手紙には「近頃は神経衰弱にて気分勝れず甚だ困り居候」「近来何となく気分鬱陶敷書見も碌々出来ず心外に候生を天地の間に亨けて此の一生をなす事もなく送り候様の脳になりはせぬかと自ら疑懼致候」と書いています。この頃、「夏目が発狂した」という噂が

日本にも伝わっています。

このような状態は明治 36 年に帰国後も続きました。夫人の夏目鏡子述「漱石の思い出」によると、むやみと癩癩を起こし、手あたりしだいに物を投げつけるなど、家人にあたっていたようです。

例えば火鉢のふちにのっていた五輪銭を見て、いきなりぴしゃりと長女をなぐる。いったい何が何だかわからない。だんだんに聞いてみると、ロンドンで散歩中、乞食に銅貨をやったことがあり、下宿に帰ってくると、それと同じ銅貨が便所の窓にのっていた。下宿のかみさんが自分のあとをつけて監視していたのだ。それと同じことを長女がした、人をばかにしてけしからん子どもだというのです。

向かいの下宿屋にいる学生を、自分をつけている探偵と思ひ込み、朝、その学生の部屋に向って「おい、探偵君。今日は何時に学校へ行くかね」などと怒鳴ったというエピソードも書かれています。これは精神病理学的には「妄想知覚」と呼ばれている症状です。

普段とは全く違う漱石の様子に、鏡子夫人は、「身体なり頭なりに異常があるのでは」と考え、よく診てもらっていた医師の尼子四郎氏に持掛け、夫人の診察に来たついでに漱石を見てもらいます。尼子医師は「どうもただの神経衰弱じゃないようだ」「精神病の一種じゃあるまいか。しかし自分一人では何ともそのところは申し上げかねる」と呉秀三博士に診察を依頼する。呉博士は鏡子夫人に「追跡狂という精神病の一種」と説明したようです。「ああいう病気は一生なおりきるということがないものだ。なおったと思うのは実は一時沈静しているばかりで、あとできまって出てくる」と詳しく病気の説明をしてくれたといえます。しかし呉博士のカルテはこれまで発見されていません。

この 2 回目の変調は明治 37 年の春頃までつづいたようです。

第三回目の精神変調は、大正元年（1912 年）の末から大正 2 年のはじめにかけて、ちょうど「行人」を書いているころから始まり、大正 3 年頃まで続いています。この頃の鏡子は前出の「漱石の思い出」や大正 3 年の日記などから知れます。

妻や女中が自分の悪口を言っているのではないかと邪推したり、怒りっぽくいららしで家人にあたりちらす。これは以前の変調と同じですが、この時期の所管には変調を示す記載がほとんどありません。他人の目からも明らかであった以前の 2 回と比べると、第 3 回目は近い家人の目にはわかっている、他人のまえではその内面を隠しておおせていたようです。

また、鏡子夫人によれば漱石は、頭の状態が良くないときは胃の調子が良く、胃病に悩まされているときは頭の状態はよくなるという傾向があったようです。

いずれにせよ、漱石の精神変調には三つの波があり、三回ともほぼ同じ波であったのであろう。

繰り返す精神変調の波には活動的な躁状態もあった

「神経衰弱」という言葉は現在、病名として使われていません。それは、漱石の症状は、現代の精神医学の光に照らしてどう診断されるものでしょうか？。これは専門家によってはさまざまに意見がわかれ、神経症、統合失調症などの説もありますが、それは鬱病と考えられます。

夫人の述懐によれば、漱石には頭の具合いい時と悪い時とがあり、悪くないときには子供煩悩で、子どもたちが何をしようとしてここにこ笑って見ていたり、自分も一緒に遊んだりしたそうです。つまり周期的にある期間だけ異常が現れる。不安、焦燥、怒りっぽい、興奮、被害妄想などが見られます。このように、同じ症状が周期的に繰り返されるのは、鬱病のひとつの特徴です。

また鬱病には、鬱と躁の期間の繰り返すものと、鬱の状態だけが、周期的に現れるものとがあり、漱石の場合は、非常に活動的になっている期間が認められます。

例えば、二回目の変調の後、明治 37 年（1904 年）の暮れから「吾輩は猫である」を書き打始め、38 年 1 月「ホトトギス」に発表して一躍人気作家となり、明治 39 年には「坊ちゃん」「草枕」と続きますが、このころの漱石は「書き出せばほとんど一気苛性に続けざまに」書き、「ペンをとって原稿用紙に向かえば、直ちに小説ができるといったぐあいに」張り切っており、「書き損じなどというものは、まったくなくとっていいほどだった」（「漱石の思い出」といいます。これは一種の躁状態であったと推測できます。

ロンドン留学中の変調の原因を、異邦人としての疎外感、欧州人への劣等感に求める説もありますが、漱石の変調はそれ以前の二十代にも起こっている。また、ロンドンから帰国した後も 1 年以上続いていることを考えると、異国での孤独感のみが原因とは言えないでしょう。ロンドン留学がなくても漱石の鬱病は起こったであります。

統合失調症の説をとる人は、漱石の被害妄想や幻覚に注目しています。確かに妄想、幻覚は統合失調症の特徴です。しかし、伝えられる普通の漱石には、統合失調症的な拒否的な冷たさは感じられません。偏屈で孤独壁はあったが、自分ひとりのうちに閉じこもってしまうほどではない、友人や弟子とよくつきあったことを示すたくさんの手紙がのこっているし、他人の世話もよくしています。

鏡子夫人も「非常にむっつりしているかと思えば」「調子に乗ると案外軽口で、駄洒落や皮肉をかつ飛ばしておもしろがる。」とのべているようにその人柄には温かみがかんじられます。

また、漱石は学生としても作家としても、勤勉で几帳面でした。こうした性格は鬱病の基礎に見られる、「几帳面、仕事熱心、対人的に敏感」の三つの特徴をよく表しています。

そして何より、漱石の作品には驚くほど鬱病患者の気分を的確につかみ表現しえたのは、他人への観察や取材ではありえない、自身が鬱病であったからに違いないからであろう。